川マガ東京句会　200911　自由吟　鑑賞・評　松橋帆波

親指トム親指姫がするメール
親指でメールを打つことを「親指」というキャラクターを用いて表現している。レトリックとしては「親指でメールを打つ」行為そのものについて工夫しても良かったか。
友と飲むコーヒー時に苦くって
その後に読者が何を感じるか。珈琲が実際に苦かった訳ではない。
客来れば夫をけなし笑わせる
これは身につまされる。私などの母親の世代もそう。祖父母の世代ではそうではなかった。戦後という時代を感じた。
透きとおる青空愚痴は止めにする
愚痴というものはある種の「癒し」透き通る青空はそれをきっちりと補填してくれる。
言い訳が下手で借金言い出せず
言い訳が下手な人は正直であるともいえる。自分にも正直だから、自分なら貸せないだろうという思いがぐるぐる回ってしまって、借財を言い出せないものだ。
アナログのテレビに映える月見草
野村監督は、表に見える言動よりも、その人生の歩みに日本人が潜在的に好む要素をもっているのだと思う。アナログの時代、最後の名将かもしれない。
ブレンドで嫁と姑の愚痴を飲む
この作品からは、無理に上手く作ろう、受けよう、という前に、自身の状況を真摯に見つめる視点が感じられる。
幾星霜御愛顧感謝店仕舞
リズム、文字から受けるイメージ、それぞれのギャップがとても面白い作品。
峠こえ視界広がる人生譜
何故「越え」でないのかが先ず目に付く。着想としては良くある作品。
招待状貰い御世辞を提げていく
「御世辞を提げる」という表現は手柄。物体としての形は無いものだけれど、形があるという印象を持たせたところが秀逸。
テラスからプロペラ附けて旅に出る
幾つかの事件を連想したが、時事なのかどうか判断できない。作者の方にお聞きしてみたい。
練炭をそっと買ってるサザエさん
サザエさんが何を比喩しているのかが判らなかった。作者にお聞きしてみたい。
練炭に一行増やす注意書き
二年ほど前の練炭自殺が流行ったときにも似た着想が多かった。今回は結婚詐欺女性の話。どちらもネットが絡んでいるので、そちらを絡めた下手の方が既視感をクリアできたのでは。
エンゼルの羽では飛べぬ物理学
「それを言っちゃあお仕舞いよ」というところ。「物理学」という下五がいい。かつて「ノネナール化学は酷いことを言う」という作品を作ったのを思い出した。
ウキスキー種火を捜す旅である
まず、表記だろう。何故「ウキスキー」何故「捜す」のか「ウイスキー」「探す」と比較してみたい。
狙ってた釣りの穴場へ先越され
実際の魚釣りではなく、生活の中の出来事と重ね合わせることが出来る仕立てが上手い。
這い出した穴の狭さを知る離婚
女性、男性問わず、この視点に同じ程度の共有性があるのかどうか、色々なご意見を聞いてみたい。女性の視点として理解しやすいが、離婚経験のある男性からすればそうとも言えないかもしれない。
数独を解いてやったぜワトスン君
「数独」は「SUDOKU」として世界的なものとなっている。これをテーマに句を詠まれたことが凄い。
凡人もいくつ跨いだ水溜まり
奇人・変人・奇才は水溜りに飛び込むのだろうか。色々と発想が広がっていく作品。
目に霞かかったらしい妻美人
「酔ったらしい」という設定での着想が多い中、「目に霞」というのは新鮮。「妻が美人に見える」というところは同想多数。
第三の男になってビール飲む
「第三の男」を第三者というニュアンスで読むか、「第三の男」の音から「第三のビール」を連想し、そうではない「ビール」を飲んでいる、という読みをするか、読み手を悩ませるという点で面白い作品。
そこのけそこのけマニフェストが通る
マニフェストということで、すり合わせなしに結論ありきの議論が進ンでいるように見える現状への穿ち。逆に言えば、これまでいかに軽かったかという穿ちでもある。
哀れだと思う心もまた哀れ
「心もまた」という表現で「哀れ」の内容を読者が具体的に想像することになる。言わないでいることが逆に雄弁なる、省略の妙。
ありふれた店で嬉しい味に遇う
「嬉しい味」という表現が手柄。「懐かしい」「温かい」などでは陳腐になる。味という五感と、嬉しいという感情を組み合わせたことによる効果が大きい。
さらさらと秋風感じ彼岸花
この後冬に向うという少し乾燥した空気。「さらさら」というオノマトペを上五に置くことで、読み手への土台を提供している。
あっと言う間だと言われて「あっ」と言う
この小学生のようなレスポンスが嬉しい。隙なくこういうところを見ているのかなと、作者に敬意を抱く。
白鳥の着地がなぜか決まらない
白鳥の姿の写生なのか、もっと社会的な出来事なのか、その辺を作者に聞いてみたい。
没と佳のはざま選者を悩ませる
楽屋吟だが、なるほど選出句数が決まっている競吟ゆえ、ありえる話。
ダスキンのおばさんが来る汚さなきゃ
交換に来た人に、掃除をしていないと取られるのもちょっ

と恥ずかしい。日常に存在する心の動きが見える。